

2021年度男女共同参画センターはあもにい
第2回運営審議会 議事録

1. 2022年3月9日(水) 10:00~12:00
2. 熊本市男女共同参画センターはあもにい 4F 会議室
3. 出席者
 - ◆ 運営審議会委員 (9名 五十音順)
井手志保委員 小野由起子委員 北村真理子委員 坂口京子委員
阪本恵子委員 那須円委員 本田恵介委員 宮村飛伸委員 八幡彩子委員
 - ◆ オブザーバー
熊本市文化市民局人権推進部男女共同参画課 課長 山田紀枝
 - ◆ 事務局
 - ・代表企業A 尾池千佳子(九州総合サービス株式会社 代表取締役)
太田勇雄(九州総合サービス株式会社 事業推進本部長)
 - ・構成企業B 松内隆典(熊本産業文化振興株式会社 常務取締役)
河野正治(熊本産業文化振興株式会社 総務部長)
 - ・構成企業C 藤井宥貴子(有限会社ミューズプランニング 代表取締役)
吉田稀世(有限会社ミューズプランニング 取締役)
4. 会次第及び議事内容
 - (1) 代表あいさつ(はあもにい管理運営共同企業体代表 尾池千佳子)
 - (2) 館長あいさつ(館長 坂本ミオ)
 - (3) 審議会委員および出席者紹介
 - (4) 審議
 - 議題1 はあもにい管理運営状況について 会館利用状況報告
 - 議題2 令和3年度実施事業報告
 - 議題3 令和4年度事業方針、事業計画について

5. 特記事項

議事録の署名に関しては、井手委員、宮村委員が推薦され、審議会承認となった。

6. 議事録

● 議題1 質疑応答・審議

(八幡委員)

コロナ禍も3年目に入り、やむを得ない面がある。そうした状況下で感染拡大防止対策を十分にご配慮いただき、安心して会館が利用できる環境整えていただいているかと思う。それぞれ利用者としての気づきもあるのではないか。

(本田委員)

参考までに県立劇場の2ホールと2つの大会議室の年度別の利用率の推定を調べてみた。28年度の地震の影響や、それ以降のコロナの影響での利用率の減少は概ね同じような推移になっている。県と市での対応の違いや施設そのものが違うので、一概に同じにはならないが、想定範囲内かと思う。現在回復傾向にあるのは、コロナが感染拡大した初期の頃に比べ、対策を十分に行えば、それほど心配する必要はないとわかったからだと思う。ガイドラインでは収容人数も100%まで認めている。また主催者や利用者自身も十分な対策を講じて開催されている。オミクロンの感染が落ち着かない状況ではあるが、感染対策を十分に講じてもらい、ホールやその他施設の利用率が回復することを願っている。

(八幡委員)

利用率は減少となっている一方で、ZOOM等を利用したオンラインでのイベントや講座はとても充実してきていると思う。遠隔でオンライン発信をするための施設、設備について、例えばオンライン専用の貸室を確保するなど、何か工夫などがあれば伺いたい。

(事務局 堀井)

令和2年度に熊本市の予算で館内、メインホール、多目的ホールの有線LAN設備の拡充を行っていただいた。専用のビデオカメラ、挿画や編集共にできるパソコンなども配備してもらった。複数の貸室でもオンラインの配信、収録等が可能な環境が整っている。

(八幡委員)

大学は今後、以前のような対面中心の授業になると思う。しかし、「対面は怖いので、遠隔でも授業を受ける環境を」という要望も予想される。そうなればハイブリッド仕様で授業を行うことになるが、その場合の課題は音声を確実に拾えるかどうか。はあもにいでのイベントに実際足を運び、楽しむ方だけでなく、ZOOM等の方法で新たにイベントに参加できる方も増えている。両方の利用者の拡大を止めない工夫が必要ではないかと思っているが、いかがでしょうか。

(事務局 坂本)

昨年度から講座の一部でハイブリッドを用いており、講演会も一度行っている。しかし対面だけ、オンラインだけに比べ、さまざまな手が必要で、スタッフの人数や技術を非常に要する。提供する側の都合ではあるが、現状ではハイブリッドではない形の方がまだありがたい状況。環境の整備とスタッフのスキルが少しずつ上がり、慣れてくればより柔軟な対応が可能になると思う。ハイブリッドで再就職支援講座を行ったときには、来館された方たちは子どもを預けて参加できる。来館できない方はオンラインで参加できると、非常に喜んでいただいた。可能性をきちんと確認し、今後も努力していきたい。

(八幡委員)

ハイブリッドが難しい場合、確実に音声を拾って、YouTube 動画でオンデマンド形式での開催という方法もあるかと思う。検討をお願いしたい。

(坂口委員)

普段少人数の対面でやっているのですが、自身はオンラインについては不得手だが、今の小学生や大学生、20 代の若者は上手に使っているという実感はある。ハイブリッドの講座など大学生を巻き込んでいく形で何か企画を実施、スキルを上げ育てていくというのはありなのかなと思う。今後オンラインの流れは止められない。オンラインとリアルを充実していくことは、はあもにいの価値が高まる部分ではないかと感じる。

(八幡委員)

熊本市の学校教育は全国的にも ICT 教育先進市ということで、使いこなせる子どもたちがこの会館を利用する時代になってくる。そうした時代へ向けて、環境を整えていただけるとありがたい。

● 議題 2、3 質疑応答・審議

(宮村委員)

事業報告を聞き、内容の充実が図られており、いろいろと工夫がされていることがわかる。私は民間企業から、そして男性として参加しているので、その辺も踏まえて話したいと思う。22 ページの「親子で元気におうち遊び」について新規の方が 89% 参加されたとあるが、どういった広報で申し込まれたのか。

(事務局 伊井)

市政だよりに加えて、熊本市の LINE の広報も利用させていただいている。若い世代からは、熊本市の LINE を見てからの応募が多くなっている。熊本市の LINE は登録された方にジャンルごとのお知らせが届くようになっている。

(宮村委員)

民間企業に勤務し、普通に生活をしている中でこの一年間、はあもにいの情報が全く入ってこないと感じた。はあもにい通信が届く人は見ればわかるが、そうでない方が全く目にすることがないのはもったいない。SNS を活用していると聞いている。告知をもっと工夫してもらえればと思う。また、チラシを見ると専門用語が多いような感じがする。一般の会社員の男性は「デートDV」や、また今でこそ広まっているが「テレワーク」などあまり耳にしない言葉は、大体の場合スルーしてしまう気がする。専門用語には解説を加えたりして、利用者の目線に立ったチラシにすることで申込者が増えるのではないかと。

(事務局 伊井)

最初に質問いただいたパパ応援企画「親子で元気におうち遊び」に関して、チラシ作成時、講師の水野さんに見ていただき、こういう文言を入れた方がいいのではないかなどたくさんアドバイスを頂いた。宮村さんからのご指摘の通りだと思う。若い世代からは LINE の広報を出した瞬間に申し込みが入ってくることもある。LINE で広報をしていることの周知もそうだが、まず市の LINE に登録していただくというところの啓発を併せてやっていくことが、宮村さんのように、情報が来ないという方を減らすことだと思った。発信することで安心するのではなく、さまざまな状況の方に広報する方法を考えていきたい。

(宮村委員)

熊本市の LINE はどこから登録するのか。

(熊本市 山田課長)

熊本市の公式 LINE がある。趣味や行政、子育てなど自分の興味のあるジャンルを登録すると、それに応じた情報が入ってくる。熊本市の LINE は反応が早く、若い世代には浸透している。LINE を始めた頃は市政だよりに申込みの QR コードを載せたりしていた。広報課へ LINE の周知を改めてできないか伝える。

(八幡委員)

宮村委員には平日仕事がお忙しい中、運営審議会に参加いただき、本当に貴重な意見を頂いていると思う。男女共同参画に関するいろいろな情報を、職場にお勤めの男性の方にどのように伝えるかという視点が不足していたのかなと思いながら、拝聴した。熊本県では、よかボス企業の登録制度があり、登録している企業宛てにいろいろな情報が行くような仕組みになっている。熊本市もワーク・ライフ・バランスなど企業向け講座を実施している。市の LINE だけではなく、企業向けに男女共同参画に関する情報を届ける方法を行政の方でも検討してもらいたい。

(井手委員)

34 ページに若年層への啓発ということで、SDGs の目標 5 番「ジェンダー平等を実現しよう」を防災出前に絡めて学ぶ機会を持つとあるが、とても良い取り組みだと思う。私も難し

い言葉が並ぶと面倒で分かりづらいと思うときもある。親子で SDGs を学べる機会があってもいいのではないか。親子の読み聞かせなどで、「今日は何番を学びましょう」のような、遊びながら親子で学ぶ機会を作ってもいいかもしれない。5 番を学んだら、また別の日は 2 番、3 番と、学べる機会を増やし、企業の人や、子育て世代、学生など学びたい人が増えていけば、さまざまな意味で広がりがあるのではないかと思う。私は先日、熊本市立総合ビジネス専門学校の夜間の部を卒業したが、昼間の学生たちが YouTube 配信など、オンライン対応を頑張っていた。卒業式でも学生が写真撮影を担当したり、保護者に卒業式の様子を動画配信したりしていた。おそらくそうしたことを学んでいるのだと思う。同じ熊本市同士、何か絡めたりできないかなと思う。

(八幡委員)

分かりやすさは大事だと感じる。この 10 年の間に専門性が高まってきている分、内容についてやや専門的な用語等が出てきているところがあるのかもしれない。

(坂口委員)

講座の後のつながりがいいと思う。講座内容の充実はもちろんだが、講座後のフォローや丁寧なオンライン講座への案内、講座の内容がきちんと反映されている冊子、ラジオなどがすごくいい。さまざまなアプローチの仕方で伝える努力をされており、感心している。講師も新しい考え方を持つ人や、今話題の人を選定している。情報キャッチ能力が素晴らしい。市民グループのエンパワー活用については、草の根的に動いている市民グループをサポートすることはすごくいい。そこから継続して、今の問題を地道に捉えている小さなグループに対して、課題を拾い上げていくことは流れが変わるといえるか、大きな力になっていくと思うので、これからも力を入れていただきたい。企業への案内にプラス教育的部分で教職員、保育関係の方への案内も必要だと思う。先生方はコロナ禍でさらに忙しく、新しい情報を勉強する暇がない。熊本市の教育長もおっしゃっているが、熊本の教育現場は昭和のままだが、子どもたちはどんどん新しい情報を得ている。子どもたちは専門用語を理解しているが、大人は頭の中で昔の価値観のまま教育をしている。そこに軋轢があることを子どもたちから感じている。小学校高学年はとても賢いし、よく考え、それぞれに意思を持っている。しかし中学で押さえつけられ、高校でも自分の真の選択が狭められていくという子どもたちもいる。はあもにいは防災にしても時代の流れを上手く捉えているので、若年層が対象になるものは、教育者と保護者向けに力を入れてもらおうと変わっていくように感じる。教育委員会と手を取って、教職員向けの研修・講座などを広報し、参加していただけるような流れを作るといいなと思う。中学生の保護者を対象にした講座を行ったことは、すごく良い。

(八幡委員)

熊本市は今年 1 月の終わりからエデュケーションウィークというオンラインのイベントを大々的に開催。熊本の教育がどうなっているのかという内容で YouTube や ZOOM を活用し

ながらのイベントだった。学校教育や社会教育、公民館プロジェクトなどさまざまな講座があった。例えばその一つとリンクするとか、国際女性デーのミモザウィークにつなげるなど、市民向けにプログラムを組んで情報発信をする。つなげるという意味ではさまざまな可能性があるのではという提言を頂いた。すぐにとは言わないが、今後の展望として検討いただくとけるとありがたい。

(那須委員)

多彩な活動をされており、皆さんの取り組みに感謝をしたいと思います。今日車を駐車場に停めて裏の入り口から入ってきたが、ミモザの黄色い花が咲いていた。会館管理もきちんとされていると感じた。1期目、2期目の取り組みが会館利用者の拡大に数字で表れている。しかしこの2年はコロナ禍で会館運営も非常に苦労されたように思う。最初はオンラインというやむを得ない方法だったが、逆にチャンスになったと思う。例えば講座を対面で行うと定員を設定する必要がある。しかしオンラインだと定員に関係なく、多くの人がネットを通じ、非常に貴重な情報を知ることができる道が開けてきた。オンラインを上手に活かしていく必要がある。働いている男性や企業にどのように活動を知らせていくかということは、私も大事だと思う。市のSNS、LINEも大事だが、市のLINEは自分に興味あるテーマについての情報は来るが、それ以外は来ない。先ほど、はあもにいのFacebookを拝見したが、チラシなどいろいろ掲載され情報発信されている。しかし「いいね」が少なく、シェアをする数が1人、2人であった。自分の知り合いからいろんな情報が届くという意味でFacebookも含めて講座の参加者に登録してもらいながら「ぜひシェアしてください」という呼びかけをしてもいいのではないかと。18ページ、出水南中学校で保護者向けの講座をされたとあるが、非常に大事だと思う。私もPTA活動をしている。各区でPTA主催の保護者向けのセミナー学習会や研修会を開いているが、テーマのマンネリ化という課題がある。講師や講座の案内を情報提供としてPTAへ行くと、保護者にとってテーマを選ぶ際の参考になるし、男女共同参画の取り組みも広がっていくのではないだろうか。16ページ、DV教育プログラム男性編の対象がDV加害男性とある。普通DV加害者は自分がDVをしている自覚がない方が多いと思うが、DV加害者男性がなぜこの講座に参加しようと思ったのか、またどんな工夫があったのかを教えて欲しい。

(事務局 伊井)

主催者の中のメンバーの1人が精神科のドクターで、そういったカウンセリングを行っており、通っている男性や、相談にきた女性から配偶者の方へ勧めていただいた。また別のメンバーはウィメンズカウセリングルームという団体で女性のカウンセリングを行っており、そこに相談に行った女性から配偶者の方に呼びかけていただいたりしている。メンバーには児童相談所や保健所の職員も多い。児童相談所に子どもの問題で相談があり調べていくと、お父さんのDVだったということで受講につながったケースもあった。男性本人がどう

にかしなくてはと受講を希望されることもあるが、今回の講座に関しては以上のような経緯で受講された。

(那須委員)

この講座に参加することがすごいなと思ったし、さまざまなつながりを使って参加されたということもよくわかった。3期目も期待している。

(八幡委員)

私も同じことを思った。対象にDV加害男性と打ち出したときに申し込みしやすいのかと疑問に感じた。DV加害男性と打ち出したからこそ、自分のことだと自覚のある方は受講されるのか、どうなのかなと思った。いろんな専門機関と連携をして受講者を集めたということを理解した。

(事務局 坂本)

普通の講座と違って、はあもにいへ電話して申し込んでくださいというものではない。告知はするが、連絡先は主催側と直接やりとりをするような形になっている。本人が相談しようというときも、知らない人に話すのではなく、専門家に話をするのでハードルはそれほど高くない。

(八幡委員)

那須委員は市議会で指定管理についても話されているかと思う。市議会の審議の様子や情報を教えてほしい。またジェンダーに関する取り組みがあるのかなど情報提供もお願いしたい。

(那須委員)

昨日は国際女性デーであったということもあり、議会の中でもDVや男女共同参画について質問をされる議員もいた。指定管理については、指定管理者へ応募するところが固定化してきているとの意見があった。本来、民間からアイデアを出し、競い合って指定管理が選ばれる。しかしどこも固定されてきたのではないかと議会の中で意見があった。はあもにいについては固定化とかマンネリ化というわけではなく、毎回新しいアイデアを取り入れながら多彩な活動をされているので3期目の指定があったのだと思う。私は議会で、女性の孤立や自殺について熊本市の実態はどうなっているのかなど、声を上げられない方の声を拾うためにも実体調査のしっかり行ってくださいということ要望した。市は取り組んでいただけるとの回答だった。皆さんの厳しい意見など含め、議会に寄せていただきたい。

(八幡委員)

これからも議会との橋渡しとしてお力を発揮していただけるとありがたい。今日はタブレットをお持ちになっているが、今後審議会もペーパーレスを検討することが必要なのかもしれない。すぐには言わないが、3期に向けての一つの視点ということで、検討いただきたい。

(北村委員)

2年以上続いているコロナ禍で、さまざまな内容の事業を、対面を主流としながら何かあった時にはすぐにオンラインに変更されている。多大なご苦勞があっただろうと思う。私は校区の青少協の役を仰せつかっているが、この2年は思うように活動が進んでいない。私自身が勤める園では、登園自肅要請が出て以来、半分程度の家庭が登園を自肅。その時、顔が見えないことで子どもとの距離を感じ、何かやらなきゃいけないと思った。試行錯誤を重ね、ZOOMによるオンライン配信を学年ごとに週1~2回ほど行っている。リハーサルも行っているが、Wi-Fiが上手くつながらない、音声不良、配信の10時半ごろに一斉に参加するためZOOMが落ちるなどのトラブルに、試行錯誤しながら今に至っている。はあもにいの皆さんの大変さがよくわかる。子どもたちは画面の向こうにいつもの先生の顔が見え、名前が呼ばれ返事をするといった、日頃やってきた些細なことを行うことで、対面では会えないが心はつながっているというのを実感できているようだ。私たちも年を取って使えないではなく、何とか使える工夫をしていかなければと思っている。先ほど坂口委員から教育についてのご意見があった。私は長年、父親の育児参加について関わってきたが、以前と比べ送り迎えに来られる男性が随分と増えた。私が子育てをしている時とは雲泥の差で、特に朝は出勤前に送って来られる父親が多く、昔は当たり前ではなかった光景が、今は当たり前になるようになった。お父様方も自分の役割と実感してもらうところからスタートなのかと思い、毎朝「ご苦勞様です」と声かけをしている。また日頃園に来ることが難しい父親のために、保育参観など何かできないかと考えている。工作などを父親と一緒にすることで子どもはとても喜ぶので、そういった機会を増やしたい。例えばそういったときに、はあもにいと連携できるのではないかと。参加した親子が「父と子が一緒にやることもいいな」と実感してもらえと思う。父親自身に「子育ては楽しい」と気づいてもらうことが出発点だと思う。そういう意味で相談をし、何かできればと思っている。また、「当たり前」の定義がどんどん変わってきていることを実感している。今はマスクをしているのが当たり前。私は花粉症で、以前の今頃マスクをしていたら「風邪ですか？」と聞かれ、「花粉症です」とやり取りをしていたが今は一切言われなくなった。しかし、まだ「働く女性」と言う。女性が働くのは当たり前なのに、そういった表現が使われている。「働く男性」とはあまり聞かない。小さい子どもと生活している身なので、小さいうちから声かけや、遊びの中で男女ともに働くことが当たり前なことと理解してもらい、そういった底辺のところに尽力していきたいと思う。多様性を認める、いろんな社会づくりにつながっていく。はあもにい通信を読ませていただいているが、館長が先日書かれていた「働き続ける原動力を女性だから聞かれる。そんなことのない時代はもうここに来ているのでしょうか？」というところにとっても共感した。女性だからというわけではなく、人としてお互いに認められるような社会づくりに意識を変えていきたい。

(八幡委員)

いつも子育てや地域の視点で発言いただく九州ルーテル学院大学の広渡先生に代わり、北村委員から保育の現場の現状や地域の状況のご意見をいただき、たいへんありがたい。地域の視点で言うと、従来高齢の方の地域の方が講演会や講座を楽しみに参加しておられたが、オンラインに変更したために参加できなかったという話があった。高齢者の方にオンラインを経験し慣れていただき、ICT弱者から脱却をしてもらおう。そういった地域向けの取り組みも検討いただきたい。

(本田委員)

はあもにいの運営審議会の規定を先ほど拝見したが、審議事項は、事業計画と事業実績に関することとあり、運営そのものについて話してもいいのか分からないが、少し違った視点で述べさせていただきたい。先ほどから指定管理の3期目に入ると話が出ている。熊本市のホームページから今回の選定結果についてダウンロードした。申請したのは今の運営している共同企業体1社だけだったようだが、項目評価配点表に項目別の点数が出ている。全体として点数は高いが、相対的に見ると低い項目が2項目ある。1つは「事業計画書に沿って当該施設の管理を安定して行う人員、資産その他の経営の規模及び能力を有すること」、もう1つは「安全管理の状況」という項目で相対的だが他に比べ点数が低くなっている。今回の選定委員会のメンバーの中には舞台関係者の方もいて、その方が低くされたのかどうかとかはわからないが、安全面を安定的に管理ができる人員が揃っているのかという疑問があったのではないかと、選定結果から読みとれた。指定管理料は熊本市から示された範囲内で積み上げを行っているかと思うが、適正な人員がきちんと確保できているのか。確保できない状況であれば、3期目の5年間の中で熊本市へ現場の声をどんどん上げていって欲しい。安全は何よりも大事なことなので、指定管理者制度だからコストを下げればいいということではなく、必要な人員をちゃんと確保できるような予算措置をきちんと取っていただくというように熊本市と交渉もしていいのではと思う。安全管理の舞台という面では、多目的ホールとメインホールは非常に危険を伴うところ。施設は古くなっており、機材などもメーカー側からは耐用年数が超えているとの指摘もあるのではないかと。そういった機材を含め熊本市に更新を行っていただくためにも、点検の結果や安全性の確保がどれだけ重要であるかなど、共同体の皆さんと市が課題の共有をきちんと行っていくことを希望する。

(事務局 坂本)

人員については、市から指定されている人員数よりも厚い配置をしており、市のモニタリングでは常に二重丸の評価を頂いている。今回指定管理選定の審査員の皆さんがどういう点で人員について疑問に思われたのか、確認をしないといけないと改めて思った。施設の老朽化に伴い、安全管理は一番の課題である。常にきちんと点検を行い、すぐに市に報告をしている。市の方からもコロナで予算が厳しい中、対応をさせていただいており、危険がないよう

順次進めているところだ。ご安心いただければと思う。

(小野委員)

宮村委員から情報発信について意見があった。私も市民が知らないのはもったいないと思う。SNS を見てみると、熊本市の公式 LINE の他に、例えば動植物園や現代美術館は公式 Instagram を持っている。はあもににもそういった SNS の窓口を一つ持つことを検討してもいいのではないかと。情報発信だけではなく災害時や緊急時の投げかけも一番市民にダイレクトに届くのではないかと。福岡市動物園の SNS は、「コメントなどはお答えできませんので、問い合わせは直接ください」といった但し書きがある。スタッフの負担にならない程度でできる細かい発信ができると、はあもにのフォロワー、ファンも増えていくのではないかと。また、前回の運営審議会では GE ジャーナルを卒業式ではなく入学式にという意見を述べたが、これほどすぐに対応していただけたとは思わなかった。一市民の意見を取り入れていただき、ありがたい。熊日では国際女性デーに合わせて、ジェンダーギャップ指数を取り上げた。現状を見える化したい点が多い。特に男性の意識、中でも私たちの子供の世代、若い現場の記者の世代など価値観は変わってきているが、まだ行動に移らない、つながっていない。そういう意味で、2022 年度のメンズカレッジの全 3 回のうち 2 回を企業研修として参加いただけるようにというのは、いい取り組み。ルーテルの保育科の生徒たちを対象にしたキャリア教育、ワーク・ライフ・バランス講座を、男性向けにも行うなど、若い男性世代への教育の機会も増やしてほしい。また、4 月から 18 歳は成人となる。成人式や成年法などが中心に議論されているが、はあもにとして、そこをターゲットにした企画などあれば教えてほしい。

(事務局 坂本)

GE ジャーナル vol. 2 がその企画であった。18 歳で成人になることを伝えようと思い作成し、今年も配付する予定だった。しかし第 1 回の審議会では高校 1 年生の方がいいのではというご意見や、専門家などの意見も取り入れ、高校 1 年生が入学式で手に取れば、無くさず、しばらく手元に持ってもらえるだろうと考え、入学式に配付をすることにした。次年度 18 歳の成人に関する企画は、今のところは計画していないが今後考えていきたい。

(八幡委員)

熊日 1 面トップで国際女性デーの記事を取り上げていた。熊本でなぜ男性の育児休業率が上がらないのか。熊本の場合は、取得を促すような社会的な力が不足しているように感じる。その圧力を増やすためには単独の取り組みでは難しく、さまざまところと連携し、そうした力を高めていく必要がある。国際女性デーにちなんでロシアのプーチン大統領が女性を並べた状況の中でウクライナ情勢を語るという映像が流れた。いろいろな思いでご覧になった方もいると思うが、情報発信としての上手さも感じた。

(阪本委員)

コロナ禍の中、はあもにいの運営やボリュームのある講座を対面だったり、ZOOM だったりと臨機応変に対応されたことは大変だったと思う。私が所属する商工会議所女性会は年齢層が高めで、いろんな事業をやりたいと思っても、ZOOM を使って行うことは難しかった。また、男性への DV 教育について初めて触れたように思う。DV 加害男性は、「自分はそんなことをしていない」とみんな思っているのではないか。自分が DV 加害者だと認識してもらうためにはどうすればいいか、工夫が必要だと感じる。お父さんが子ども達と一緒にキャンプ飯のような料理をしている講座があった。お父さんと一緒に楽しんで料理をする子どもと、家庭の中で DV を見て育った子どもの違いを考えると、親子で参加する事業を多くしていただけるとありがたい。また、ウィメンズカレッジ、メンズカレッジというような女性だけ、男性だけと区切らず、一緒にすることによってお互いを尊重できる面もある。子どもたちは家庭の中で自分というものを作っていくので、親に似るといのはきっとそういうことだと思う。そういった意味で家庭の中に浸透できるような講座があるといいのではないか。

(八幡委員)

女性会における取り組みもお伺いできる機会が持てるといいと思う。市からもご意見や情報を伺いたい。

(熊本市 山田課長)

市議会の委員会で、はあもにいの運営審議会の中ではどういった議論がなされているのかという質問があった。私からはメンズカレッジや男性の視点に立った男女共同参画についてなどご意見をいただいた事に対して取り組んだことを伝えた。

前回ご意見のあった、GE ジャーナルの配布時期を卒業式から入学式にというご意見についても、教育委員会に情報を共有し、入学式に配布するよう依頼をしている。

また、同様に前回要望があったサーマルカメラについても、購入の準備を進めている。

今後とも皆様のご意見を頂きたい。

(八幡委員)

はあもにいと行政の窓口、橋渡しをしていただく重要な役だと思うので、ぜひお力添えいただきたい。本当にさまざまなご意見を出していただいた。第2期の総括と第3期につなげる皆様からの意見を、今後に生かしていただくことをお願いして今回の審議を閉じる。